



acc japan 通信

2021年グラント受賞者紹介

PICK UP

「『完全版マハーバーラタ』とはなにか」

小池博史さん（ACC1994年グランティ）

グランティ・インタビュー

「小さな気づきの、その向こうへ。」

津田道子さん（ACC2018年グランティ）

ACC Supporters around the World

グループ サーティスリー

Group 33 —台湾アート・パトロン・グループの活動—

カバー写真：津田道子 近影

Photo: IIKAWA Takehiro

VOL.02
.....
2021/9



Grantee
Interview

グランティ・インタビュー

小さな気づきの、その向こうへ。

アーティスト

津田 道子 さん

インスタレーション、映像、パフォーマンスなど多様な形態を横断する作品制作とともに、昨年から「art for all」や「表現の現場調査団」といった社会へ向けた発信と改善へ向けて動かれています。ACCフェローシップでは、コロナ禍になる直前まで、米国に六カ月間滞在なさっていました。米国でのお話、制作への思い、社会活動についてお聞きしました。

美術と

パフォーマンス・アーツの間で

ACCへ応募する数年前からですが、日本の現代美術におけるアートシーンは、ダンスや舞台芸術におけるシーンとは少し離れていて、そのちょうど中間あたりにまさに自分がやりたいことができるメディアがあると感じていたのですが、そうした状況が日本には少ない……と感じていました。

二〇一六年に神村恵さん（ダンサー・振付家）とパフォーマンス・ユニット「乳歯」を始め、翌年三月、恵比寿映像祭で、ダンサー兼振付家・映像作家であるイヴォンヌ・レーナの作品を観たときに衝撃を受けました。この作品とレーナについて理解を深めてい

くことが私には必要と感じました。

私が観たレーナの作品は、ドキュメンタリー風で、実験的でありながら、映画としてきちんと作品になっていて、女性の更年期を扱っていました。「老いること」「ジェンダー」に触れられており、ダンス作品と映画の境界をまたぐレーナの活動をよく知るために、拠点のひとつであるニューヨークに行ってみたくてリアルに感じるようになりました。これがACCへ応募するきっかけになります。

ACC助成で渡米

二〇一九年六月から十一月にかけて米国に滞在し、おもにNYでレーナやローカルなパフォーマンス・アーツのリサーチをしました。リンカーンセンターやNYパブリックライブラリーでパフォーマンス・アーツの資料を見たり、関係者の方々に話を聞きに行ったり、LAのGetty Institute内のレーナ・アーカイヴで調査もしました。リサーチを重ね、レーナの公演や幸運にもリハールを実際に鑑賞することも出来ました。実感とともに全容を掴みつつ、自分の探求意義を捉えようというところで滞在が終わってしまいました。再渡米も視野に、今はまたそこから考えたい思いがあります。

滞在中ACCからは「ここでしか得られない体感を大切にしてほしい」と言われました。つまり、成果だけを追い求めるのではなく、「ここで生活するだけで、体得できることを大事に」とのことでした。これはとてもACCならではと思っています。

なのでリサーチでダンス・ワークシヨップを受けたり、ヨガをしたり、道行く様々な人と気さくに話をしたり……自分のリズムでやっていきました。オープンな気持ちでいると、色んなことに出会え、何でもつながってくる感覚がありました。「こうじゃなきゃいけない」といった考え方もなくなり、いいかどうかは別として、なにかのネジがとれた気がします（笑）。得難い経験でした。

NYで小津安二郎の映画を観る

Film Forumという映画館で、東京の下町にまつわる上映プログラムがあり、小津の「東京物語」が好きで何度か観ましたが、映画は観る環境で見えてくるものが変わると思います。東京の映画を米国人に囲まれながら観るということは稀有な経験になりました。帰国後、そこでの感触を活かし、ユニットを組む神村さんとレクチャー・パフォーマンスの公演をしました。小津映画に出てくる女性“の立ち居振る舞いや仕草を「振付」

『東京仕草』展示風景
東京国際クルーズターミナルにて7月7日（水）より
開催中の「Back TOKYO Forth」展より



Photo by : Akira Arai (Nacasa & Partners Inc.)

として捉えました。

たとえば歩き方ひとつでも、劇中、笠智衆さんといった男性は真っ直ぐ歩くことが多く、杉村春子さんや三宅邦子さんら女性の俳優はわりと蛇行するんです。女性が色んな家事やサポートをする役割であるとともに、かばんを持つ、座布団を持つ、お茶を運ぶといった動作が、画面の豊かな動きを作っているのでは、たぶん動きとしても役割としても映画自体を動かしているのは女性なんじゃないか、と検証していきました。

生活をつくることが、制作に。

今年七月からの展覧会「Back TOKYO Forth」（お台場・東京国際クルーズターミナル於）では「東京仕草」というインスタレーションを出品しています。こちらも小津の「東京物語」に出てくる女性の仕草に着目した作品です。

かつてお台場にはペリーが来航し、ちよう

どその百年後の一九五三年に「東京物語」は発表されています。この百年は、東京が江戸から昭和の高度経済成長へと向かう怒濤の時代で、女性の家事が一番大変な時期だったこともわかっていきます。女性の仕草に注目することで、過去から未来へ向かう文脈と想像へ



2019年11月に開催されたACCのガラ・パーティーにて、ACCのグランティと。

の作用に繋がれば幸いです。

以前は、作品をつくること、生活をつくることをきっちり切り替えていましたが、今はその距離を縮めようとしています。金沢の今の住まいも、築百年ほどの日本家屋ですが、生活をつくること自体が制作につながっていると考えてます。身体を作ることや、生活する場所、建物など、その歴史や時間と、作品で実現する時間空間の関係を意識しています。複数の時間が重なる経験を作りたいと思っています。

米国で出会った支援者の皆様

NY滞在中、二百名を超えるACCのガラ・パーティーが開かれ、私も参加いたしました。米国では個々人で寄付なさる民間の方が数多くいらつしやり、そうした方々と直接お話できたことは印象深かったです。「何がしてほしい？」と尋ねられ、「え？ すでにだいぶ助かってますけど」と、申し訳ないような思いがあったのですが、ここで気づきを得ました。

私はこれまで、世の中の要求に応えるのではなく、「世の中に疑問や要求を投げかける」ものとして芸術に関わってきたと思っています。渡航には支援して頂きましたが、資

金を出してもらっているから従うのではなく、お互いに作用し合う関係性の中で「芸術が存在する世の中」を米国で実感できた気がします。支援なさる方にとっては、アーティストと話をし、具体的に何に資金提供しているかわかることがモチベーションや意義につながると聞いています。リクエストや提案をしつかりすることで、遠いと思っていたことへももっとつながっていききたい、と思わされました。

「art for all」表現の現場調査団」について

そうしたこともあって、作品制作とは別ですが、コロナ禍に始まった「art for all」というネットワークのような活動にも関わるようになりました。昨年五月〜六月ごろからです。

美術に携わる私たちがつながろうとせず、働きかけてこなかったため、あまり支援の対象になっていない状況がありました。私たちも複雑な世の中の一部であって、ちょっとした気づきを伝えていく大切さがあるので、と動いています。

「表現の現場調査団」という活動も昨年十一月に発足され、私も今年一月から携わって

います。五年限定のプロジェクトで、毎年対象を変えて調査をします。一年目はハラスメントで、二年目はジェンダーバランスについてです。

調査団メンバーには、ACCのグランティも何人かいますが、このことは結果的に思っています。海外での経験を経て日本を客観的に捉え、改善したい状況が見えるのかもしれないですし、作家活動を超えて多角的に活躍している方々ともいえます。

分断の世の中と言われる中で、小さな気づきを大事にし、身の回りからちょっとしたアクションを起こすことは、遠いところへとつながって、近づいていけるような感覚があります。直接的にも間接的にも、です。作品制作はもちろん、より広い視野でやっていきたいです。機会をくださったACCに感謝しております。

(取材・構成 松平節)



小さな気づきを大事にし、
身の回りからちょっとしたアクションを起こすことは、
遠いところへとつながっていきけるような感覚があります。

プロフィール

津田道子 (つだ みちこ)

神奈川生まれ。金沢美術工芸大学准教授。
東京藝術大学大学院映像研究科博士号取得。
2016年より神村恵とのパフォーマンス・ユニット「乳歯」を展開。
主な展覧会に、2020年「Arts Towada十周年記念 インター+プレイ展 第1期」(十和田市現代美術館)、2019年「あいちトリエンナーレ2019: 情の時代(Taming Y/Our Passion)」(四間道会場 伊藤家住宅)、「六本木クロッシング2019展: つないでみる」(森美術館)など。主な個展に、2020年「Trilogue」(TARO NASU、東京)、2017年「Observing Forest」(Zarya現代美術センター、ウラジオストク)ほか。
作家ホームページ: <http://2da.jp/>→

2021 年 グラント受賞者 紹介



これまでの日本の ACC
グランティ紹介ページはこちら！

◆ ニューヨーク・フェローシップ (米国・ニューヨーク 6 ヶ月) ◆

三野 新 Arata Mino

ビジュアル・アート／写真家・舞台作家

ニューヨーク近代美術館のアーカイブにおけるエドワード・スタイケン作品研究およびニューヨーク市とその周辺の現代視覚・舞台芸術の実態調査。

ACC Saison Foundation Fellow*



パフォーマンス風景
『息』をし続けている』2018
Chim ↑ Pom 「にんげんレストラン」(東京)
Photo: Shinichiro Ishihara



田中みゆき Miyuki Tanaka

ビジュアル・アート／インディペンデントキュレーター、
プロデューサー、エディター

"障害" を扱う分野横断的な企画制作のため、視覚・舞台
芸術とデザインの交わりについて調査。



企画プロジェクト
『音で観るダンスのワークインプログレス』
2017～2019 (KAAT 神奈川芸術劇場)
Photo: Masaaki Nishino



◆ 個人フェローシップ ◆

キューンチョメ (ホンマエリ&ナブチ) Kyunchome (Eri Homma & Nabuchi)

ビジュアル・アート／アート・ユニット

ハワイにて4ヶ月間の共同個人フェローシップ。ハワイに
おける日系移民および沖縄系移民の子孫たちのアイデン
ティティと文化の調査。



映像作品
『トラを食べたハト』からのスタイル
2018 - 2020



清水チャートリー Chatori Shimizu

音楽／作曲家、サウンド・アーティスト

中国にて6ヶ月間の個人フェローシップ。中国の伝統音楽
と現代音楽の両方で「笙」がどのように使われているかを
研究。



◆ 団体助成 ◆

特定非営利法人 ブリッジフォージアーツアンドエデュケーション Bridge for the Arts and Education

演劇、ダンス、音楽

交流国：日本、インドネシア、タイ、マレーシア、インド、カンボジア

2021年8月開催の舞台作品『完全版マハーバー
ラタ』に参加するアーティストによる音楽ワー
クショップとオープンフォーラム開催支援。

ACC Saison Foundation Fellow*

『完全版マハーバーラタ』
東京公演、2021
Photo: 許方子



PARC

特定非営利活動法人国際舞台芸術交流センター (PARC) Japan Center, Pacific Basin Arts Communication (PARC)

演劇、ダンス、パフォーマンス・アート

交流国：日本、タイ、韓国、台湾、香港、米国

アジアと世界の舞台芸術のプロフェッショ
ナルのための国際プラットフォーム「国際
舞台芸術ミーティングin横浜 (TPAM)」にお
ける交流プログラム「TPAMエクスチェンジ
2021」実施への支援。

ACC Saison Foundation Fellow*

2021 年 TPAM 開催時の様子



「PROJECT SEED」バーチャル・アカデミー PROJECT SEED Virtual Academy 管理業務委託団体 (Fiscal Sponsor) New York Foundation for the Arts

音楽

交流国：日本、マレーシア、米国、中国

日本出身の作曲家清水チャートリーと、マレー
シア出身の作曲家ジュンイ・チョーによる、日
本と中国の笙の作曲技法を芸術音楽作曲家に
伝える、バーチャルアカデミー「SEED 2021」
(2021年春～夏) の開催支援。



2021年4月「SEED2021」のオリエンテーションの様子

2021: Orientation

助成：公益財団法人セゾン文化財団
公益社団法人企業メセナ協議会

公益財団法人セゾン文化財団

芸術・文化による社会創造ファンド
企業メセナ協議会

*「ACC Saison Foundation Fellow」は、公益財団法人セゾン文化財団
による助成金が充当される活動に授与しています。

PICK UP

演出家

小池博史 さん (ACC1994年グランティ)

『完全版マハーバーラタ』とはなにか



詳しくは『完全版マハーバーラタ』HPへ！

Photo：許方于

二〇二一年の団体助成で支援させていただいたプロジェクトの中から、今年八月に開催された舞台作品『マハーバーラタ』に参加したアーティストによる音楽ワークショップとオーブンフォーラムを実施された特定非営利法人ブリッジフォーアーツアンドエデュケーションより、演出家の小池博史さんにプロジェクトの背景とご感想をご寄稿いただきました。

二〇一三年から開始し、昨年を除いて毎年アジア各地で一章ずつ制作、上演を続けてきた『マハーバーラタ』。それが『完全版マハーバーラタ』として六時間半の全編作品となり上演、二〇二二年八月二三日に終了した。この間、本プロジェクトに付随する調査やワークショップ、レクチャー、シンポジウム等にACCからは幾度もグラントを頂くことができ、公演だけに止まらない多様な展開が可能となった。深く感謝している。

まずこれからエクステンジブプログラムの根幹に位置する『完全版マハーバーラタ』プロジェクトについて記しておきたい。

『マハーバーラタ』はご存知の通り、世界最長のインド叙事詩であり、アジア哲学の根幹に位置する。また『マハーバーラタ』の全編舞台作品化は三〇年前にピーター・ブルックが行っているだけで、演者のほとんどが伝統舞踊家というのは初。アジアの伝統舞踊家の特質として挙げられるのは総合的な身体技能を持つ点で、ゆえに演技、歌などを含めて総合的身体化が可能となる。よって、美

術、音楽、衣装、光、身体が混じり合った本質的な総合芸術作品の制作が可能となった。

そもそもアジア人による上演を思い立ったのは二〇一一年の三・一一後すぐ。パバ・タラフマラから小池博史ブリッジプロジェクトに変わった当初から『マハーバーラタ』はその重要な柱に据えていた。今後の社会、世界を考えるための一助としようとしたのだ。

ブリッジプロジェクトの名前の通り、私はいかにして世界を繋ぎ、人間の可能性を残せるかが今後の大きな課題だと思っている。作品創作はその根幹に位置するが、創作自体が目的ではなく創作とその成果を通じての可能性の認知が最も重要である。これが世界を融和させる起因となるからだ。

ちなみに『完全版マハーバーラタ』の参加者にはACCのグランティが五人存在しており、アジア内でのACCの果たしてきた役割の大きさを物語っていたが、今回、ACCの助成によって行ったプロジェクトは以下の通り。

琉球音楽と南・東南アジアとの親和性についてのワークショップがひとつ。ふたつ目は公演後に日本国内の識者を招いたオーブンフォーラムで、本企画には演者と音楽家、私

が参加した。

まず、琉球音楽に焦点をあてたワークショップ。琉球音楽家による沖縄音楽の歴史や概要についてのレクチャー・デモンストラーション演奏があった後、実践型ワークショップを実施した。本作品では、七つの言語、多様な音楽、空間造形等、多種の要素を

重要な舞台芸術言語と見なして舞台上で調和させ、汎アジア的世界を表出したが、改めて琉球音楽は日本とアジアを結ぶ接着剤の役割を果たしていることがわかった。

『完全版マハーバーラタ』の上演後に行ったオーブンフォーラムでは、二〇一三年からの創作過程を総括し、アジア四カ国からのアーティストが、本事業を通して獲得したもののや、自国の舞台芸術、伝統芸能について語った。また、今後のアジアにおける舞台芸術や伝統芸能の可能性と、持続可能性の視点から、アーティストが社会の中でどのような役割を担っていくべきかについて討議し、アジア的思想や哲学の源流である『マハーバーラタ』に込められた「共生」社会のあり方について考察した。

今、あらゆる面で私たちは境界線に立っているとの認識が必須である。それを再認識する上でも本公演、ワークショップ、フォーラムは意味を持った。私たちは世界に大きく目を開かねばならない。時は待ってくれない。可能性はまだ残っている。



小池博史 (こいけ ひろし)

空間演出家・作家・振付家・映像作家、「舞台芸術の学校」代表、武蔵野美術大学空間演出デザイン学科教授。「小池博史ブリッジプロジェクト」の代表として、創造性を核に教育・発信・創作を三本柱とした連携プロジェクトを展開。現在までに演劇・舞踊・美術・音楽等のジャンルを超えた空間芸術作品を10カ国で創作、40カ国で公演。

Photo：許方于

Group 33 グループ・サーティスリー

—台湾アート・パトロン・グループの活動—

ACCの世界各国・地域の拠点では、支援者の皆様によるユニークな支援活動がそれぞれ行われています。特集第一回目は、ACC台湾のアート・パトロン（支援者）・グループ「Group 33」の活動をご紹介します。

「Group 33」は台北市、台中市、台南市の3都市それぞれを拠点とした3つのアート・パトロン・グループの総称です。ACCとそのグランティを支える友情と愛情に基づいて、2000年に台北市において設立され、その後2008年に台南市にて「Group 33 South」が、2011年に台中市にて「Group 33 Central」が設立されました。現在、各支部40名、全体120名の会員で構成されています。

「Group 33」は「自由な精神、柔軟性、尊敬 Free spirit, Flexibility and Respect」をモットーとしています。ACC台湾のフェローシップ・プロ



2020年8月に開催されたACC台湾財団理事役員とGroup 33主催によるACC台湾25周年記念式典

グラムへの金銭的な支援だけでなく、グランティが必要とする楽器等物品の寄贈や、グランティの活動をより深く理解するためのスタジオ訪問などの会員限定のイベントを定期的に主催するなど、多様な支援活動を通して、Group 33ファミリーの絆を深めています。

次世代のアート愛好家が増える中、今年8月末に「Young Group 33」を立ち上げたとのことで、さらなる発展が期待されています。



2000年のGroup 33設立当時、初代メンバーの記念写真。左から：シュエリン・ツァイ、セシル・シャー、リタ・チャン（ACC台湾ディレクター）、パオリン・シュエ、ルーロン・リュウ

メンバーの声



Cecile Shah
セシル・シャーさん
(Group 33設立時代代表)
写真中央

親子3世代に渡るGroup 33メンバー（左から：マリー・H. シャー、セシル・シャー、エレン・カイ）

「私にとってGroup 33は、私自身を成長させてくれた場であり、グランティへの愛を示す場でもあります。25年前、私は母と共にACCの支援活動に参加し、その後グランティのための財源をより多く集めるため、仲間と共にGroup 33を立ち上げました。グランティの成長を見守ることだけでなく、ACCへの愛と支援を通じて仲間たちと絆を深めることができたことも幸せに感じています。」



Paolin Hsu パオリン・シュエさん
(Group 33設立メンバー、ACC台湾財団 理事)

「Group 33を設立した当初、私はアートにそこまで詳しくはありませんでした。この活動を通して、仲間やグランティと共にアートや文化への情熱や理解を深めることができたことに感謝しています。Group 33が成功したのは、柔軟性とメンバーへの敬意があったからだと思っています。プレッシャーもルールもありません（期日通りに寄付すること以外は）。私たちは芸術で絆を深めたのです。」



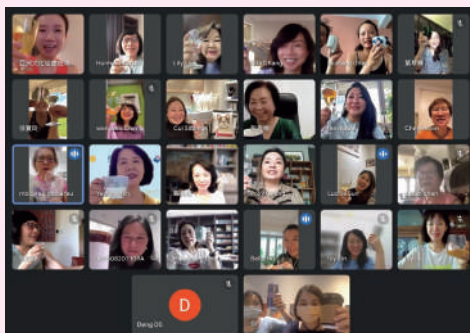
Y.C. HO Y.C. ホーさん
(Group 33 長期メンバー)

「Group 33は、アートの知識と各個人の成長を促す泉である。」

Group 33 活動紹介



2019年11月、ACC台湾財団の台湾東南アジアプログラムの初年度を記念した、Group 33 Southの台東での2日間旅行の様子（ACC台湾主催）。台湾原住民族のアーティストを代表するラヘズ・タリフ（Rahic Talif）さん（ACC2000/2020年グランティ）を訪問。



今年7月、ロックダウン中に開催された、第19回台新芸術賞の年間グランプリと舞台芸術賞をそれぞれ受賞したACC2016年グランティのイエ・ミンファ（Ming Hwa Yeh）さんと2013年グランティのウーカン・チェン（Wu-Kang Chen）さん夫妻のオンライン受賞記念イベントの様子。



2019年11月に、国際文化会館（東京・六本木）にて開催したACC台湾とACC日本の交流昼食会での様子。

ACC Japan ファウンディングメンバーが発足しました！

ACC日本財団の活動をより一層強固なものにするため「ファウンディングメンバー」が発足しました。

ファウンディングメンバーの方々はアーティストやアートの専門家による国際文化交流支援を行うACCの趣旨を深くご理解頂き、より積極的にACCの活動にご参加いただくと共に、多くのご支援（会費・ご寄付）を頂いております。

ACC日本財団は、以前からのACC Japan メンバーズ会員の方々ならびにファウンディングメンバーの方々のご期待に添えるよう、今後も助成事業を通じた国際交流の促進と、皆様にご参加・交流いただけるイベントを提供して参ります。

<会費（ご寄付）>

ACC Japan ファウンディングメンバー：ゴールド会員（300万円～/3年）シルバー会員（100万円～/3年）*いずれも分割可

ACC Japan メンバーズ：個人（3万円～/1年）法人（10万円～/1年）

*メンバーズ会員でファウンディングメンバーご希望の方は是非、事務局までお申し出ください。

ACC Japan ファウンディングメンバー（2021年9月22日現在、名字アルファベット順、敬称略）

ゴールド会員

藤井ダニエル	Daniel Fujii
ピーター・ギャランテ	Peter Galante
程 近智	Chikatomo Hodo
石井剛太	Gota Ishii
川崎 ローレン プリス	Lauren Bliss Kawasaki
近藤正晃 ジェームス	James Kondo
草野隆史	Takafumi Kusano
長尾佳子	June Nagao
新浪剛史	Tak Niinami
小澤真也	Shinya Ozawa
ティエリー・ポルテ	Thierry Porté
高木ジム	Jim. M Takagi
田中正明	Masaaki Tanaka
土田耕作	Kosaku Tsuchida
渡 伸一郎	Shin Watari
山下 剛	Go Yamashita

シルバー会員

阿部 修	Osamu Abe
アーネスト M. 比嘉	Ernest M. Higa
平野龍一	Ryoichi Hirano
菅 大介	Daisuke Kan
マイケル・クー	Michael Khoo
三井洋子	Yoko Mitsui
坪山昌司	Shoji Tsuboyama
宇田麻衣子	Maiko Uda
（他匿名希望2名）	



「ACC Japan グランティ インタビュー」シリーズ 配信スタート！

ACC日本財団では、ACCのグランティを迎え、それぞれの活動や人生について何うインタビュービデオシリーズの配信を今年7月より開始いたしました。

幅広い分野で活躍するグランティの皆様、ACCで経験した様々なことが今の活動にどう影響を与えているか、また、国境を越えた活動について思うことなど、それぞれの言葉をお届けしています。

第1回は、美術家の会田誠さんと岡田裕子さん（共に1999年グランティ）、第2回は劇作家・演出家の坂手洋二さん（1998年グランティ）にご出演いただきました。第3回は今年12月末頃を予定しています。

今後の展開に是非ご期待ください！

第1回：会田 誠・岡田裕子



日本語字幕バージョン



英語字幕バージョン



第2回：坂手洋二



日本語字幕バージョン



ACC JapanのYouTubeチャンネルにて配信中！

英語字幕バージョンは近日公開予定

北陸工芸の祭典「GO FOR KOGEI 2021」

会期：2021年9月10日（金）～10月24日（日）

会場：富山県、石川県、福井県 各会場

富山、石川、福井の北陸3県を舞台に繰り広げられる、工芸の祭典。「工芸の時代、新しい日常」をテーマに、「現代アート化する工芸」と「デザイン化する工芸」が、高岡、金沢、小松、越前で同時開催する2つの特別展、また、北陸の工芸産地をリアルとオンラインで巡るプログラムにて紹介されます。

*総合監修/特別展キュレーターは秋元雄史さん（ACC日本財団理事）です。



詳しくは
「GO FOR KOGEI 2021」HPへ！



MOTアニュアル2021 海、リビングルーム、頭蓋骨

会期：2021年7月17日（土）～10月17日（日）

会場：東京都現代美術館 企画展示室 地下2F

MOTアニュアルは、若手アーティストの活動を通じて、国内の現代美術の潮流のひとつを紹介するグループ展。

*ACC2014年グランティの潘逸舟さんが参加されています。

<東京都現代美術館にて同時開催中>

「GENKYO 横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は？」

*横尾忠則さんはACC1968年グランティです。

「MOTコレクション Journals 日々、記す
特別展示: マーク・マンダース『保管と展示』」
*ACC1989年グランティの宮島達男さん、2001年グランティの大岩オスカルさん、2017年グランティの竹内公太さんの作品が出品されています。



詳しくは
東京都現代美術館HPへ！



「語りの複数性」

会期：2021年10月9日（土）～12月26日（日）

会場：東京都渋谷公園通りギャラリー

情報が溢れるからこそ貧しくなっていた、さまざまな語りのあり方と、その語りを紡ぎ出す身体を想像する展覧会。8人の作家による写真、絵画、模型、絵字幕、映像、音といった多様な形態の作品が紹介されます。

*ACC2021年グランティの田中みゆきさんが展覧会企画担当者として、また、2013年グランティの山本高之さん、2016年グランティの百瀬文さんと山崎阿弥さんが出品作家として参加されています。



詳しくは
ギャラリーHPへ！



三陸国際芸術祭2021

会期：2021年7月～2022年3月

会場：三陸沿岸地域 各会場

三陸沿岸という土地で幾世代もの伝承を経て根付き、今も脈々と受け継がれている「郷土芸能の魅力の発信」と、「国内外との芸能を通じた交流」を目的に2014年から毎年開催している芸術祭。今年は、三陸を縦断するアートプロジェクト、三陸とアジアの芸能の交流事業などがリアルまたはオンラインで開催されます。

*ACC1996年グランティの佐東範一さん（NPO法人JCDN代表）がプロデューサーとして2014年に三陸国際芸術祭をスタートされました。



詳しくは
三陸国際芸術祭HPへ！



ACC日本財団理事就任のお知らせ

この度、ACC日本財団の理事として新たに富川秀二氏（三井不動産投資顧問株式会社 代表取締役社長）及び牧山嘉道氏（リップル法律事務所 弁護士）が就任しました。（令和3年9月13日付）

ACC日本財団 代表理事 麻生和子

ACC公式ホームページ
公式SNSへはこちらから！



asian cultural council

Asian Cultural Council Japan Foundation
一般財団法人アジアン・カルチュラル・カウンシル日本財団
104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4F
Tel:03-3535-0287 Fax:03-3535-5565 Email:acc@accjpn.org